慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	Albrecht Schöne : Emblematik und Drama im Zeitalter des Barock
Sub Title	Emblematik und Drama im Zeitalter des Barock, by Albrecht Schöne
Author	中田, 美喜(Nakada, Yoshiki)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1965
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.20, (1965. 11) ,p.156(34)- 159(31)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00200001-0159

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

Albrecht Schöne: Emblematik und Drama im Zeitalter des Barock

中田美喜

かつて Richard Alewyn は、その著 „Johann Beer. Studien zum Roman des 17. Jahrhunderts“ (1932) によって、ドイツ・バロック文学研究に新時代を劃したのであったが、本稿の論題をなす Prof. Albrecht Schöne (Göttingen) の新著 (München 1964) は、共通する方法的精神の新たな実現・勝利であり、Alewyn に匹敵する、同じくまさに発見的な業績といい得よう。

Alewyn の功績は、鋭敏にして柔軟な文学感覚と緻密かつ周到な組織的・文献学的探索をもって、Johann Beer なる一個の作家を約300年にもわたる完全な忘却から発掘して、従来かろうじて Grimmelshausen やその „Simplicissimus“ 等にのみ局限されていたドイツ・バロック小説の版図を拡大するとともに、単にバロック小説の再評価を招来したのみならず、もっぱら詩と悲劇を対象に造り上げられていたそれ以前のバロック文学像を, Johann Beer の人と作品を手がかりに、いまや全く別種の照明に据えてみせたことにあった。彼の試みは、いわばバロック文学自身に対して、それが後期ルネッサンス的擬古典主義からして常に韻文特に悲劇を重視し散文小説の意義を否定せんとするその芸術的外面の背後を衝き、むしろ逆にそうした芸術的 Hybris に禍いされない面における、それの未知の豊饒性を自覚せしめんとするものであったし、従ってまたそれは、多かれ少なかれ結局は当のバロック的 Fassade や Hybris に幻惑されたものといわざるを得ないところの、大半のそれ以前のバロック研究に対する一つの明確な批判でもあった。ドイツにおけるバロック研究は1920年代に一種の学問的流行となって最初の興隆を示すが、ここにおいても他の分野におけると同様、研究の方向を決定づけたのは H. Cysarz, J. Petersen, Gundolf, Ermatinger 等いわゆる理念史派の大家らであって、対象はほとんど詩と悲劇と Grimmelshausen に限られていた。様式史的な Fr. Strich といえども、バロックに関するかぎり、著しく理念的たるをまぬかれなかった。ここにおいて Alewyn の投じた一石は、あたかもかの „Simplicissimus“ 第6巻の承認が、Gundolf をしてこの小説を5巻の世界観小説として解釈することを不可能ならしめたごとく、詩と悲劇の王国のなかにやがて Chr. Weise, U. A. v. Braunschweig, Ziegler,

Hunold ら散文小説家たちの滔々たる侵入の端緒を開くことによって、文字通りバロック的な混乱を生み、理念史派の後退を促すこととなった。而して第2次大戦を経過した1950年以降、バロック研究がふたたびしかも今回はヨーロッパ的規模をもって抬頭するに至った現在において、ドイツにあってはむしろ小説と、いま一つのジャンルたる喜劇とに関心が集中し、いわく解釈学的、いわく形態論的、いわく社会学的等々，新しい形式における実証主義の方向が顕著である。およそ評価・再評価の交替は研究史の常であって、現在の傾向を理念史派に対する反動と見なす速断は避けられるべきであり、また方法論の是非を論ずることは本稿のかぎりではないが、しかし少くとも以下の二点、すなわちバロック研究のこの第2期において詩特に悲劇の研究は不活潑の状態にあること、および、かかる状況にあってそのバロック悲劇に関するほとんど最初の体系的著述であるところの Schöne の著は、その広汎な引用と浩瀚な文献目録にもかかわらず、第1期における理念史派の獲得物を完全な無視に置いた観があること、は極めて注目すべき事実であると思われる。20年代のバロック悲劇研究から Schöne によって救い出されたものが、当時はむしろ傍流ないし異端の地位にあった Walter Benjamin に尽きるということは、その著 „Ursprung des deutschen Trauerspiels" (1928・1963) の最近における再評価の事実とともに、ひとり Schöne の著作のみならず、現在におけるバロック研究の様態を考察する上で興味を惹くところである。

○

Schöne の構想は極めて冒険的であると同時に単純明快である。バロック悲劇の特徴を寓喩性 (das Allegorische) および直証性 (das Deiktische) に凝縮したのは、彼より先 Benjamin の犀利な哲学的頭脳であったが、Benjamin がこの前提から出発してもっぱらギリシア悲劇に対するドイツ・バロック悲劇の特徴づけに向かった一方、Schöne は同じ前提から直ちにバロック悲劇の原型の探究に向かったのであった。というよりも事実はむしろ、Schöne は Benjamin のすぐれた推論を利用することによって、改めてみずからバロックの悲劇理論の叢林に道を踏み迷う愚を避けたというべきであろう。しかしそのいずれにもせよ、Benjamin の推論に対して、その推論の正しさを立証し、誤まりを修正するに足る事実性を備えた手がかりは Schöne によって発見されたのである。すなわち Allegorik から Emblematik への核心の移行、それが Benjamin から Schöne への移行であり、しかも Schöne の自信溢れる見事な演繹によりそれは決定的な移行となったように思われるのである。Schöne の構想を最も簡単に略述するならば、まず Lohenstein, Gryphius, Hallmann, Haugwitz というバロックの代表的悲劇詩人らが、16

世紀中葉から18世紀にかけてヨーロッパに盛大に流行した寓意画(Emblem, Emblemata)という文学と絵画の中間的な下位ジャンルに対して強い親近性を有していたことを示唆したのち(第1章)、その寓意画の構造や機能や成立の伝統的背景および寓意技法としての応用を論述し(第2章)、やがてそれら寓意画の世界に属するものが上記の悲劇詩人の作品に比喩等の文体手段として無数に応用された実例を列挙しつつ、それらこそまさに「バロック的様式」であることを確言し(第3章)、さらに一歩進んで、寓意画の応用は単に悲劇内の諸部分のみにとどまるものでなく、例えば pictura-inscriptio-subscriptio という寓意画の構造と機能はそのまま Abhandlung-Sentenz-Reihen という悲劇の構造と機能へと移し得るほどに両者間の一致が存在すると述べ(第4章)、最後に、悲劇が上演される舞台を一つの大きな額縁と見立てた場合、演劇全体が人生の寓意画であるといういわゆる Theatrum emblematicum の理念を掲げつつ、バロック悲劇の本質は寓意画的なものにあると、而してまたバロックの時代は、Herder とともに、ほとんど寓意画的な時代といい得ようと結ぶのである(第5章)。

寓意画によるドイツ・バロック悲劇の解明とは未曽有の恐るべき創見といわなければならない。因みに、本書第2章 „Einführung in die Emblematik" の旧稿はすでにこれより先1963年(DVjs.)に発表されたが、筆者は当時それのあまりの迂遠さに警戒心を覚えたのみであり、それがやがて特に第4章における天馬空を行くがごとき、しかも細心水も洩らさぬ完璧な立論の基盤たるものであるとは予想だにしなかった。この著作の根本的構想はすでに1959年口頭で発表されたと述べられているところから、この著作はほぼ第4章、第5章、第2章の順序で形をなしてゆき、第3章は恐らく最大の時間と精力を費して、Emblembücher や Impresensammlungen の渉猟およびそれらと諸詩人の Text との間の間断なき往復のうちに極めて徐々に蓄積されていったものであろう。さし当たりわれわれにとって最も裨益するところ大であるのは、第4章における、造語法から語法、幕分け、合唱の配分、書割りそして外題に至るまでのバロック悲劇の構造的特徴の論述であろう。これらの個々については、著者自身も認めるごとく、すでに他の研究者によって成果が上げられているが、ここにおけるようにそれらを完全に統一された視点から観察するという例は――その当否は一応さて置き――かつてなかったのである。確かに時として不安を覚えさせられるほどあまりに明晰で軽快な論理の展開が見られる。例えば第5章中の「画から演技へ」の節において著者は文字通り、寓意画から悲劇に至る次元的距離と広場の活人画からバロック劇場への時間的経過とを同一視して、そこでドイツ演劇史の重要な一齣を素描して見せるのであるが、立論の鮮かさには感服しつ

つも、果してそれによって如何なる程度までの歴史的事実が把捉されるかと反省するとき、この部分やや傍証の不足を感ぜざるを得ないのである。英・仏・伊・蘭等各国語にわたる多数の文献——それはひとり Schöne 以外に用途を見出し得る者は少ないと思われるほどユニックなものが多い——の駆使と、例えば Harsdörffer の場合に見られるような引用の巧みさは Wolfgang Kayser を彷彿させるが、最後に特にわれわれが注目したいのは、第3章の、バロック悲劇における比喩の使用について Breitinger がなした批判に対する再批判である。著者はここで鋭い Polemik の才の片鱗を閃めかせつつ Breitinger の非難はバロック悲劇の比喩の使用の様態にではなく使用の目的に向けられているのであり、しかもその目的を誤認したものであると論破する。この18世紀の代表的詩論家に対して述べられたことは、それ以後のバロック研究がともすれば陥りやすかった方法上の誤謬を、一例をもってよく指摘し得たものと考えてよい。バロック文学の即自的な理解、それがここに汲み取られるこの著の理念なのである。

(C. H. Beck Verlag. München 1964)